
ひぐらしのなく頃に～ i n オリキャラ～

烏天狗

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ひぐらしのなく頃に〜inオリキャラ〜

【Nコード】

N3543T

【作者名】

烏天狗

【あらすじ】

見切り発車のひぐらし2次創作。オリキャラを投入して原作をばったばたさせる予定。

目下の目標は週末作戦を乗り越え、生き残ること。

この小説は思いつきかつ携帯執筆のため更新速度は亀の如くです。作者は常にネタ欠乏症を患っているため小ネタを提供してくれればうれしいです。

ここはどこだ！（前書き）

見切り発車1話目。切りの良いところまで長い……

ここはどこだ！

（知らない天井だ）

目を覚ますと見慣れない天井が目に入った。

思わず某アニメの名台詞を思い浮かべてしまったわけだがどういうことだ？

俺は部屋でパソコンに向かっていたはずだ。そしてここはどうみても俺の部屋じゃないし、俺の家でもない。

左右を見渡せば、昔の日本家屋のようだ。ふむ、なんというか和を感じられる。

枕元に水差しとコップがあっただので落ち着くためにも一杯飲む。うん、うまい。じいちゃんの家天井水んような清涼感だ。

そこで、俺は気づいた。ジャージ上下という部屋着だったはずなのにいつの間にか浴衣みたいな服に着替えていた。

「あ、気がついたんだ」

唐突に襖が開いて女性が入ってきた。緑の髪をポニーテールにまとめた勝ち気そうな少女。はて、どこかでみたような……

「心配したんだよ、うちの裏山で倒れてて半日も目を覚まさないし、あ、ばつちやよんでくるから」

そういつて少女は出て行った。

せめて俺の発言を待ってから次の行動に移ってほしい。しかし……緑髪のポニーテ、腰に巻いた上着に右肩につけたモデルガン……おかしいな、気を失う前までにやっていたPCゲーの登場人物にそっくりな気がする。嫌な予感。いやまさかな、あれは小説だけの物語だろ

「気がついたんだって？」

今度は黒の和服に身を包んだ綺麗な女性が入ってきた。さっきの少女を大人にして落ち着きをプラスした感じだろうか……いやいやcoolになるな、俺。

「どうしたんだい？そんなに人の顔見て」

「いや、なんでもないです」

「ふうん、へんな子だねえ、どれ」

ふお！ 額に触れた手のひらが冷たい！

「熱は下がったみたいだねえ、食欲はあるかい？」

「え、はい」

そういえば腹が空いてる。朝昼晩抜いてゲームに集中していたせいか。

「そうかい。ならおかゆでも持ってきてあげよう」

ちよつと待つてな、と女性が出て行くがここがどこなのか説明して欲しい。いや、ある程度予想はついていているけど、認めちゃいけない気がする。

「起きたんだねえ、体は大丈夫なのかい？」

3人目の来訪者。和服を着た腰の曲がった小柄な老婆だが眼光は鋭い。先ほどの美少女を伴って失礼するよ、と俺の枕元に座った。

「あの、助けて頂いたようでありがとうございます」

「おや、礼儀正しい子だねえ。魅音、お前も見習いな」

老婆にたしなめられた美少女がうへへとこまかすように笑ったが、今なんて言った？

「園崎家といってわかるかねえ、あたしや園崎の当主、園崎おりょう、こっちは孫の魅音だ。あんたはなんて名前だい？」

園崎家、当主のおりょう……いやいや、偶然偶然。それより俺の名前は……あれ？

「えつとすみません。名前言えません」

「言えない？ こっちは名乗ったのに名乗るのが礼儀だろうよ」

おりょうさんがちよつと不機嫌になった。怖え、これが園崎家当主か。

「いや、違っんです。自分の名前、分らないんです」

「分らない？」

あ、おりょうさんと魅音が顔を見合わせてる。そうだね、驚く

よね。

「記憶喪失って奴かな、ばっちゃ？」

「そうかもね、あんた、頭を打った覚えないかい？」

「いや、ちょっと分かりません」

残念ながら覚えてないんだわね。そもそもどうやってここにきかもわからないし。

「ううん、入江先生に診てもらった方がいいね。魅音、ちょっと診療所に電話しな」

「わかった、ばっちゃ」

魅音がぱたぱたと部屋を出ていく。

「入江先生？」

もしかなくてもあのひとだよね。

「ああ、入江診療所の入江先生だよ。こんな田舎に立派な診療所を建ててくれてねえ、良い人だよ」

ああ、やつぱり。うん、あの人は良い人だから大丈夫……いやいや、待て待て。

入江所長に伝わる↓鷹野に伝わる↓記憶喪失かつ身元不明↓都合のいい実験材料！？

「ヤバイ！！」

「わっ！ 急にどうしたんだい？」

「いや、なんでもないです。それより医者は大丈夫です」

なんとしても入江との遭遇は回避せねば……状況はよくわからないけど、死亡フラグは立てれん。

「ばっちゃ、監督すぐにくるってさ」

ジーザス！ かくなる上は脱出するしか。

「すみません、もう大丈夫です。お世話になりました」

「ちよつとなに言ってるのさ！ 自分の名前も思い出せないのになどこに行くっての？」

ごもつともだけど、座して死を待つ俺ではないのだ。

「うおっ！」

「きゃっ！」

あ、足が鈍ってやがる。なんだこれ、たった半日でこんなになるのか。

「ほら、そんなふらふらな足でどこに行くつてのさ！」

「だ、大丈夫！　ちよつとふらついただけだから」

うおお、動け、俺の足。毎日、一緒に走ったじゃないか。

「いよし！」

動く、動く。俺の服は？　　ない。仕方ないので、このまま。出口どっちだ？

「すみません、玄関はどっちです？」

「おい、少年。急にどうしたんだい？　少し落ち着きなさい」

おりょうさんがたしなめてくるが、そんな場合ではない。くそ、なんとなくこつちだ！

「ちよつと待ちなつてば！」

待てと言われて待つ奴はいない。ええい、邪魔！

よし、見つけた！

「あー靴もないのか」

玄関にあるのはサンダルや女ものの靴、それに明らかに俺よりサイズの小さいスニーカー。俺の靴はどこ行った！

「ただーいま。って貴方誰です？」

第4村人出現！　こんなときに！

「詩音！　いいところに！　その子捕まえて！」

「なんだか分からないけど、葛西」

「はい、詩音さん」

詩音に続いて入ってきたサングラスに黒服の男、ちよ、怖いんですけど！　葛西辰義さん！

「すみません、手荒にしたくないんでおとなしく捕まってください」

「こちらこそ、すみません！」

先手必勝！　見的必殺！

「ふおおりゃああ！！」

懷に飛び込み、襟首に袖をとって気合一閃、一本背負い。

「ぐわ……」

「葛西！」

不意をつけたおかげか。まさか本物のヤクザに一本背負いを決められるとは。

「そして今のうち！」

もう障害はない。詩音が立ちはだかっているけど、問題ない。

「すみません、お世話になりましたっああええええ！」

「ずだーん！　ってあれ？　あれ？」

「しおーん、ナイス！」

「つたく、葛西ったらだらしがないんだから」

「いてて、すみません。油断しました」

「ちょ、嘘お！　詩音ってこんなに強かったの？」

合気道かなにかで投げ飛ばされ、現在進行形で玄關の土間に組み伏せられている俺。

「は、離せ！　後生だから見逃してくれ！」

「ちょ、そんなに暴れると危ない、あ」

「ぐげえ！？」

めっちゃいたあああ！　なにこれ！　どんな技！？

「ああもう、めんどくさい。もうこれで！」

「ちよっと詩音、それはやりすぎ！」

「大丈夫、出力調整してちよっと筋肉が弛緩するくらいにするから」

「ちょ、やめ……！　待て、話せば分かるって」

「そうだ、スタンガンを常備してる奴だっけか。」

「問答無用です」

「しおーんちやーん！」

あばば、待て待て。ヤメロ！　バチバチさせんな！　止めてくれ、魅音に葛西さん。さつきは投げ飛ばして悪かった！

「何の騒ぎだい！！　騒々しい！」

「お母さん」

「茜さん」

救世主キターーーーー（・・）茶碗を乗せたお盆を持った茜さん登場！ これでびりびりから逃れられる。

「魅音、状況を簡潔明瞭に説明しな！」

おお、茜さん、地味にこええ。

「えつとばっちゃを呼んできて、その子の名前を聞いたら分からないって答えて、記憶喪失じゃないかって」

「記憶喪失？ なんですか、そのおもしろ設定？」

「詩音、質問はまとめて最後に受け付ける予定だから黙ってな。あと逃がすんじゃないよ」

はい、と締め付け直す詩音。くそ、まったく緩まねえ、ていうか抑えつけられている腕の感覚が……

「それで監督を呼んだんだけど、そしたらその子が医者はいい、もう大丈夫だからって逃げ出して、たまたま鉢合わせた葛西さんに取り抑えてもらおうとしたら逆に逃げとばしちゃって」

「あら、葛西。あんた、こんな子にやられたの？」

「面目ないです、茜さん」

茜さんが驚いたような顔をしてるが、まあ、ヤクザが一般人にやられたら無理ないだろうな。つーかさっきからこの子、この子って俺はもう21だぞ？ 子供扱い受ける覚えはない。

「で、逃げようとしたその子を詩音が組み伏せて、暴れるもんだからスタンガンでびりびりにするところだった」

「詩音？」

「あ、ははは。いや、あんまり暴れるもので、つい」

詩音がばつの悪そうにスタンガンをしまう。母親には逆らえないのか、ともかく助かった。

「状況はわかったよ。魅音、入江先生に電話したのはいつだい？」

「ついさっきだよ」

「ならもう一回電話して、あとで連れて行くから今はいいってお断

りしてきなさい」

魅音は不思議そうにしながらも、わかった、と家の奥に消えていった。

「さて、とりあえずこれでいいかい？ 少年。事情は分からないが、医者がいやなんだろう？」

「あ、はい。ありがとうございます」

うつ、でも後で連れて行かれる可能性があるのか……好きをみて逃げ出せばいいか。

「詩音、話してやりな。そのかわり逃げ出そうとしたらやっていいからね」

「はいはい、お母さん」

詩音がどいてくれたのはいいが、すっかり釘をさされた……

「さて、訳ありのようだし、それだけ暴れられるのなら体の方は平気そうだね。じっくり話を聞かせてもらおうか」

笑顔が怖いです、茜さん。

いっはどっだ！（後書き）

次話どうしよう

園崎家

「さて、それじゃ、話を聞こうかい」

園崎家の居間。

上座に裁判官のごとくのごとく鎮座しているのは園崎家当主、園崎おりょう。そして下座に座らされて判決を待つ被告人は俺。長方形のテーブルの左右には魅音、詩音、茜さん、葛西さんがいる。心なし、サングラスの奥から圧力を感じるのは気のせいだろうか。やっぱり素人に投げられて怒ってる？

「あの、葛西さん？ さっきはすみませんでした」

「問題ありません。それにしてもきれいに決めてくれましたね。おかげでかえって受け身が取りやすかった。柔道に心得があるのですか？」

「いえ、授業で習った程度です」

覚えてるのは一本背負いと受け身くらいだけどね。よくできたもんだ。

「あんた、学校はどこだい？ 興宮かい？」

えっと俺の出身校は……あれ？ また思い出せないや。

「すみません、思いたせません」

「そうかい。学校がわかれば問い合わせることも出来るんだけどねえ」

「確かにそうですけど、在学していたのはもう3年も前のことですから」

「「「はい？」「」」

あ、女性陣がハモった。なにか変なこと言ったかな。

「はい、少年さん、質問です！」

「あ、はい。どうぞ。えっと、詩音さん？」

いや、知ってるけどね。一応、初対面を装った方が良い気がする。

「少年さんはいくつなんですか？」

「今年で21になりますよ」

「あはは、ずいぶん童顔なんですね。冗談はさておき真面目に答えないとびりびりしますよ？」

「いや！？ 冗談じゃなくて本当なんですけど！？ ほら、こんな髭面の子供なんていないで……しょ？」

あれ？ そういつて顎を撫でたのにジヨリジヨリしない。むしろつるつるしてる。

「すみません、誰か鏡を持っていますか？」

「あ、渡しもってますよ。どうぞ、少年さん」

「ありがとうございます、詩音さん」

さて、詩音から鏡を借りてなんだかいやな予感がしながら鏡のぞき込んでみると

「なんじゃこりゃああー！！」

別人がいた。いや、正確に言うところでは。鏡に映った顔は

21歳の俺の顔ではなく、15歳くらい、つまり中学生の頃の自分の顔だった。

「記憶の混乱、ということかねえ、どう思う？ 茜？」

「そうですね、私は医者じゃありませんのでなんとも言えませんけど、そうなのかも知れませんね」

「お母さん、やっぱり監督に診てもらった方がいいんじゃない？」

「そうねえ、でも、医者はだめなんだろう？」

こくこくと激しく首肯する。入江に知られ、高野に知られて死亡フラグを建築したくない。

「どこから来たのか、たぶん、覚えてないんだろうねえ」

「はい、すみません」

そう。俺がどこからきて、名前がなんなのか。そういつた事を記憶から掘り出そうとするともやがかったようにぼやけて思い出せない。ところどころ、断片的な記憶やこの世界のことは分かるのに、なぜだ？

「あの、ここはなんというところなのですか？」

今更ながら確認してみよう。うん、これで違う土地ならとりあえず死亡フラグが減る。現状が好転する訳じゃないけど、安心はできる。

「ここは。×県鹿骨市、雛見沢地区、旧雛見沢村だよ。聞き覚えある？」

魅音が答えてくれた。まあ、途中から分かってたけど、やっぱり

りかあ。

「いや、分かりません。というより思い出せませんと言った方が正しいのかな」

「そっか……」

まさかゲームの世界で知っているというわけにもいかないよね。ただでさえ記憶喪失で危ぶまれているのにそんなことを言い出したら今度は精神異常を疑われるかもしれない。

「ねえ、少年さん。どうして医者に診てもらうのが嫌なの？」

入江所長が難見沢症候群の研究をしていて、その黒幕の鷹野に伝わりと実験材料にされそうだからです。なーんて言うわけにはいかないよなあ。

「すみません、分かりません。ただなんだかすっごく嫌なんです」

「ふーん、変なの。監督は良い人なのに」

ええ、知ってますよ。良い人だけど、そのバックにいる人がいけないんですって。

「茜さん、ここは警察に任せたらどうでしょうか？　もしかしたら搜索願が出ているかもしれません」

「そうだねえ、駐在の佐々木さんに訊いて見るかい」

「すみません、それも止めてもらえませんか？」

当然、搜索願なんか出てないだろうがこの世界に俺はまだ存在すらしてないはず。警察に調べられて身元不明なんてことで余計なことされて鷹野の耳に入ったら……いかん、また死亡フラグだ。

「それも駄目なのかい？　で、また理由はわからないと」

「はい。すみません」

「困ったねえ……」

まったく俺も困ってます。とりあえずこの場所を離れるのが先決かな。状況はよく分からないけど、この世界が祭囃以外だった場合、高確率で終末作戦に巻き込まれてしまう。

「すみません、なんだかご迷惑をおかけしてるみたいで……すぐに出ていきますから」

「出ていくって、どこか当てはあるのかい？」

んー、当てか。ないな、まったく。

「袖触れ合うも多生の縁って言うじゃないか。助けてそのままってのもいい気分じゃないし、記憶が戻るまでうちにいなよ」

「いえ、でも迷惑ですから。ほら、適当に街を歩いてればなにか思いつくかもしれませんし」

「子供が遠慮なんてするもんじゃないよ。見ての通り、うちは広いし、部屋も余ってる。自慢じゃないがうちはそれなりにお金持ちなんだ、居候のひとりやふたりは平気だよ」

どう？　と茜さんが園崎家への滞在を進めてくるが勘弁して欲しい。しかし、積極的に断られる理由もない。どうしたものか。

「それにうちは女ばかりだからね。男手があつた方が助かるのさ」

「いや、でも……ほら、魅音さんとか詩音さんも居ますし」

「あたしは別にいーよ」

「はい、私もいいですよーへんなことしようとしたらびりびりす

るだけですから」

くそ、包囲網が狭まっていく……ど、どこか突破口は……

「……決まりだね」

話を訊いてたおりょうさんが口を開いた。え、なにが決まり？

「少年、とりあえず今日は泊まっていきな。それからことはまた考えればいいじゃないか」

「いや……でも……」

「それに今から興宮に行くとしてもとつくに日が暮れてるよ。大石あたりに捕まるのが落ちだね」

「……………お世話になります」

今から見えるのは夜の帳が降りた世界。鈴虫の鳴き声が気持ちよく聞こえる。なぜ子供の姿になってしまったのか、理由はわからないけど、今の姿で夜の街をうろついていたら確実に警察に補導される。

つまりチェックメイト。園崎家でしゅくはくが決定した。

園崎家で朝（前書き）

長らく停滞しました。月1更新できればと思います

園崎家で朝

おはようございます、園崎康太です。え？ 誰だ？ いや、俺ですよ。

昨日、俺に対する尋問会が終わった後、俺の名前がわからないということが話題になった。

確かに名乗る名前がないと不便だ。そういうわけで名前を考えることになった。

といつてもすぐに思いつかず、結局、茜さんが男の子が産まれたら付けたかった『康太』という名前に決まった。ついでに名字もとなり、なにかと便利だろうというおりょうさんの一言で園崎を名乗ることが決まった。

「おや、早いねえ」

「おはようございます、おりょうさん」

習慣というのは凄いものでこんなときでも起床時間である6時にきっちり目が覚めた。

「昨日はよく眠れたかい？」

「はい。おかげさまで体調もばっちりです。それに服まで貸してもらって」

今はおりょうさんの旦那が着ていたという甚平を貸してもらっている。園崎家は茜さんや魅音、詩音など女性しかいないため俺に合う適当な服がこれしかなかったのだ。

「いいんだよ、爺さんの服もたまには着てやらんとね」

からからと笑っておりようさんは新しく孫が増えたと昨日から上機嫌だ。

「直に朝餉が出来るから手伝っておくれ。まったく魅音ときたらだらない」

ぶつぶつ魅音の文句を言いながら歩くおりようさんについて居間に向かう。

「あら、おはよう、康太。昨日はよく眠れたかい？」

「おはようございます、茜さん。おかげさまでぐっすりです」

「そうかい、そうかい」

台所で朝食の準備をしていた茜さん。んー和服が似合う。

「これを運べばいいですか？」

「悪いねえ、そうだ。それを運んだら魅音の奴を起こしてきてくれないかい？ あの子は朝が弱くてね。」

「はい。わかりました。えっと」

「魅音の部屋なら縁側を出て突き当たりだよ。寝ぼけているようなキスの一つでもして起こしてやりな」

「茜さん！」

おほほほ、と笑いながら茜さんは朝食の準備を手際よく進めていく。

というか園崎家、昨日拾ったばかりの人間にフレンドリー過ぎないか？

「ここか」

突き当たりの部屋。

襖に木のプレートで『みおん』と書いてある。

「魅音、朝だぞ」

……返事がない。

「おい、魅音。朝飯だつてば」

……起きろよ！

仕方ない。

「魅音、入るぞ。駄目だったら3秒以内に返事をしろ」

1、2、3。はい、強行突入。

襖を開けて魅音の部屋にはいる。ノック？ 襖にして意味あるの？

「うわぁ……」

魅音はすやすやと寝ていた。暑苦しかったのかタオルケットをはねのけ、盛大に寝返りをしたようだ。

「寝相悪いな」

寝間着なのか羽織っている浴衣の帯がほどけかけて、襟が大きく開き、普段なら隠されている物が見えそうで見えない。裾もめくりあがって太ももまではつちり見える。

役得なのか、とりあえず眼福と言ふことにしておこう。

「ほら、魅音。朝だつてば」

「うゝあと8時間……」

「長いわー!!」

すぱーん、とつい頭をはたいてしまった。そこはお約束です5分とか言うところだろ

「いったゝい、なにすんの、お母さん!」

「残念だったな、俺だ」

「ふえ? 誰?」

寝ぼけ眼を擦って抗議してきたが、いつもは母親に起こしてもらっているのか。

「あ、康ちゃん。おはよう……なんで私の部屋に?」

「おはよう、魅音。茜さんをお願いされたんだよ」

「あ、そうなの。ありがと……」

「もうすぐ朝飯らしいから着替えて来いよ」

まだ頭は起ききつてないのか、ぼうつとした魅音がわかった、と返事をしたので部屋を出る。

「ああ、それから魅音」

「ん、なに?」

「お前、寝相悪いんだな」

「ふっふええ!」

あ、真っ赤になった

園崎家で朝（後書き）

誤字脱字、アイデアありましたらどしどしご応募ください

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3543t/>

ひぐらしのなく頃に～inオリキャラ～

2011年11月14日17時47分発行